

# 和歌山県高野町における棕櫚の民俗

—生育限界地周辺での棕櫚栽培—

藤井 弘章

## 1. 棕櫚の概要

### 1. 植物的な特徴

棕櫚はヤシ科の樹木で、ワジユロ (*Trachycarpus excelsa* Wendl. var. *typicus*) とトウジユロ (*Trachycarpus excelsa* Wendl. var. *Fortunei*) に区別され、さらにワジユロとトウジユロの混雑種であるアイジユロが存在するという<sup>(1)</sup>。「松本 一九五二」。以下、棕櫚の植物的な特徴について、本稿にかかわる樹皮、新葉の形態を中心に概要をまとめておく。

幹に枝はなく円筒状で、葉は幹の上部に傘状に繁茂する。下に生じた葉は、幹が生長するに従って暫時枯死する。葉の柄は長く、断面は丸みを帯びた三角形をしている。そのうち二稜には棘が生じている。柄の基部には繊維状の葉鞘がある。樹皮と呼ぶのはこの繊維状の部分である。葉は年に一二枚程度生じる。新葉は扇子をたたんだ形状で発生し、成長するにつれて広がっていく<sup>(2)</sup>。「日下部 一九三九、松本 一九五二、藤田 二〇二〇」。

## 2. 和歌山県における棕櫚の歴史

棕櫚は西日本各地から関東・東北南部まで分布している。歴史的には、平安時代の『枕草子』や長谷寺（現在の奈良県桜井市）の霊験譚に登場する<sup>(3)</sup>。「瀬田 一九九五」。和歌山県においては、文永年間（一二六四～七五）に、有田郡の長峰の山中にある大堂鳴海に自生していたものを村人が掘ってきて、庭木とし

て植えたのが始まりとする伝説がある<sup>(4)</sup>。「和歌山県内務部 一八九三」。その後、弘和年間（一三八一～八四）に結城式部という人物が棕櫚の効用を里人に説き、植栽を広めたという。結城式部の子孫は楠本（昭和時代には八幡村、のち清水町、現在の有田川町）に居住する<sup>(5)</sup>。「和歌山県内務部 一八九三」。延徳元年（一四八九）には、熊野（現在の和歌山県南部）へ参詣途中の近江国菅浦（現在の長浜市西浅井町菅浦）の人びとが、「紀伊国石垣越山」（昭和時代には金屋町付近、現在の有田川町）で棕櫚を見つけて、菅浦に持ち帰ったという記録がある<sup>(6)</sup>。「瀬田 一九九五」。

江戸時代には、『紀伊名所図会』、『紀伊統風土記』、『十寸穂の薄』などによると、那賀・有田郡の山中を中心に植栽が広まり、皮が産物として取引されるようになっていた。天保年間から弘化年間（一八三〇～四八）になると、細工用の竹皮の代用品として棕櫚の新葉の晒葉が利用されることもあった<sup>(7)</sup>。「和歌山県内務部 一八九三」。ただし、江戸末期から明治末期にかけては、樹皮を縄・綱などに加工することが中心であった。

『和歌山県繊維産業史』には和歌山県における棕櫚産業が時期区分されている。明治時代は「生成期」、大正元年から昭和十一年までは「発展期」、戦時中は「統制期」、その後は「戦後期」としている<sup>(8)</sup>。「吉田ら 一九七七」。本節では、明治以降の和歌山県における棕櫚産業の概要を記しておく。

棕櫚の樹皮は耐水性と耐久性に優れているため、明治時代には漁網、マット

などとしても注目されるようになり、需要が拡大していった。明治中期までは棕櫚繩は手ないであったために生産量は限られていたが、明治後期になると足踏み式製繩機が発明され、生産量が増加していった。この時期になると、農家の副業としての加工から、専門の業者や問屋が多く登場するようになった。明治から大正時代には、輸出も盛んとなった。一方、大正時代には国産の棕櫚が不足し、中国からの棕櫚抜毛やインド産のパームなどの輸入も増加した。明治末期から昭和初期にかけては、和歌山県は全国的に棕櫚産業の中心地であり、棕櫚皮の産額は他県の産額を圧倒していた〔日下部 一九三九〕。

一方、新葉を利用した棕櫚晒葉は、明治二〇年（一八八七）ごろから始まったが、明治末期以降に技術革新をし、昭和初期にかけて急速に発展した〔日下部 一九三九〕。棕櫚晒葉についても和歌山県が他県を圧倒していた。県内においては、棕櫚皮は那賀郡が首位で、有田郡、伊都郡が続いていたが、棕櫚晒葉については、伊都郡が主産地化する傾向があったという〔吉田ら 一九七七〕。昭和三年（一九二八）～二年（一九三七）における産額は、棕櫚皮よりも棕櫚晒葉のほうが上回っていた〔和歌山県統計協会 一九三八〕。

筆者が紀美野町・有田川町などで調査してきた成果によると、和歌山県北部における棕櫚産業の特徴としては、①那賀・有田・伊都郡の山間地（上中流域）にて農家が棕櫚を栽培して樹皮・新葉を出荷する、②中流域の集落にて樹皮・新葉を仲買や加工する、③下流域にて業者・問屋が樹皮・新葉を仕入れ、加工し、全国に出荷する、というように整理できる<sup>(3)</sup>（地図1）。

第二次世界大戦中には、軍需産業として活況を呈し、戦後は樹皮をタワシの材料とすることも盛んとなる。昭和中期以降は、パーム繊維の輸入、ナイロン製品の普及などにより、棕櫚産業は衰退していった。

## 二 先行研究と高野町の調査

明治末期から昭和初期にかけては、全国的に棕櫚産業が盛んであったため、栽培植物として棕櫚に関する研究がおこなわれていた。大正時代から昭和初期には、農家副業や特種樹種としての研究が大日本山林会や各都道府県山林会などによって進められた。とくに棕櫚産業の中心地であった和歌山県においては、和歌山県林業試験場の職員によって調査され、普及書として刊行されている〔日下部 一九三九、松本 一九五二〕<sup>(4)</sup>。



地図1 和歌山県北部の棕櫚関連地図（国土地理院「電子国土」をもとに作図）

棕櫚産業が衰退したあと、和歌山県の繊維産業史の一部として棕櫚産業が取り上げられた〔吉田ら 一九七七〕。また、海南市などで棕櫚産業を記録し紹介する書籍が編纂された〔海南地方家庭用品産業史編纂委員会 一九八九、海南市立歴史民俗資料館 一九九八など〕。また、和歌山社会経済研究所や和歌山大学などによる報告や論文もみられる〔山下 二〇〇五、藤田 二〇一七・二〇一八・二〇二〇など〕。その他、歴史学〔瀬田 一九九五〕、民俗学〔村上 一九九九、加藤 二〇〇五〕などの研究もみられるが、多くはないのが実情である。

筆者は和歌山県において、自治体史、地域史のなかで生業調査をおこなってきたなかで、棕櫚産業にも注目してきた。これまで、高野町と紀美野町の棕櫚については、地域の生業のひとつとして紹介したことがある〔高野町史編纂委員会 二〇一二、藤井 二〇一四〕。紀美野町の棕櫚産業については調査成果も蓄積してきているため、別途、まとめる予定にしている。本稿では高野町の棕櫚について考察する。

本稿で対象とする高野町では、高野町史民俗編の調査を中心にして棕櫚のことを聞き取った。この調査は筆者も参加して平成二〇年（二〇〇八）～平成二三年（二〇一一）に実施し、大字高野山をのぞく町内全集落において一定期間に同質の調査を実施した。とくに筆者は生業・年中行事を担当したため、生業の聞き取りになかで棕櫚のことを聞いてきた。また、高野町内では近畿大学民俗学実習も実施した。平成二二年度（二〇〇九）・二三年度（二〇一〇）には富貴地区、平成二三年度（二〇一一）には花坂地区で、地域の民俗全般について聞き取りをおこなった。その後も、平成二四年（二〇一四）にかけて、個人的に高野町の民俗調査を実施した。

以上の調査は一〇年以上前に実施し、大正から昭和初期生まれの方々を中心

に聞いたものである。残念ながらすでに聞き取りができなくなっている話者も多数おられ、聞き取り内容自体が貴重な記録となっている。したがって、本稿をまとめて高野町における棕櫚に関する聞き取り内容を紹介しておくことにした。

また、ここまで述べてきたように、和歌山県における棕櫚産業の歴史については、産業史、地理学、社会学のアプローチによるものが大半で、民俗学からの分析は〔村上 一九九九、加藤 二〇〇五〕以外に見当たらない。このため、聞き取り調査からみえてくる棕櫚の民俗を報告することにした。

さらに、本稿では棕櫚の生育限界地周辺の栽培状況を提示するという意味合いもある。高野町は棕櫚栽培の主産地ではないようであり、加工地域でもない。しかし、先行研究では高野山と花園村（現在のかつらぎ町）との間に栽培限界があると指摘されており〔松本 一九五二〕、本稿の対象地域は栽培限界地の周辺地域といえる。このような地域での棕櫚栽培の実態は筆者が高野町史で簡単にまとめた以外に紹介されたものは見当たらない。したがって、昭和初期から中期の栽培状況を集落ごとに聞き取りした結果を丁寧にしつつ、生育限界地周辺の棕櫚の民俗を明らかにしたい。

### 三 高野町の概要

ここでは、高野町史民俗編の調査で把握した内容を中心にして、高野町の概要をまとめておく。

高野町は、和歌山県の北東部、伊都郡いとぐんの南東に位置し、南東部は奈良県、西部はかつらぎ町、北部は九度山町・橋本市と接している。町域のほぼ中央部には高野山がある。高野山は、平安時代初期に、空海によって開かれた真言宗の一大拠点であり、標高約八〇〇mの盆地の中に約一二〇の寺院がある。山上



四国方面からの参詣者が利用したルートは、かつらぎ町志賀を通り、花坂の矢立で町石道と合流して大門口へと至る西高野街道であった。昭和五年（一九三〇）にケーブルカーが開業するまでは、全国各地から高野山を目指す参詣者は、こうしたルートを通る場合が多かった。

しかし、高野山には大門口・不動坂口のほかに、黒河口・龍神口・相ノ浦口・大滝口・大峰口という入り口があり、東や南から高野山へと至る道も存在した。奈良県の五條・西吉野方面からは、富貴・筒香・摩尼などを通り、奈良県野迫川村・十津川村や熊野方面からは大滝を通り、かつらぎ町花園（旧花園村）・有田方面からは相ノ浦や湯川を通るルートがあった。このようにみると、高野町の集落は、各方面から高野山へと入るときの経由地や入り口に位置しているということが出来る。したがって、民俗的な特徴としては、富貴は奈良県の五條・西吉野方面、摩尼は奈良県方面、大滝は奈良県の野迫川方面、相ノ浦・湯川は花園・有田方面、花坂は和歌山方面、西郷は橋本・九度山方面の影響がみられる。

#### 四 高野町に関する棕櫚関連文献

##### 1. 生育限界の指標

二章で触れたように、高野町域には棕櫚の栽培限界地があると考えられる。日下部は、棕櫚の生育限界について、高野山と日高郡龍神村（現在の田辺市）を比較して、年平均気温が一〇・六℃の高野山では栽培不可能であり、平均気温二二〜三℃以上の土地であるとしている。また、一月・二月の平均気温は〇℃以下の高野山では生育しない。冬季の平均気温は三℃以上であるという〔日下部 一九三九〕。

松本は、棕櫚の適地について以下のように述べている。本稿にかかわるので

該当部分を引用しておく〔松本 一九五二〕。

気象因子の内最も重要なものは気温の関係であつて、気温の最低限界については日下部氏の研究があるが和歌山県におけるしゆる栽培の状況より見ると高野山の山部落（標高850米）付近においては寒害の為栽培は困難とされているが中腹以下（標高500米以下）においては現に相当栽培されている。高野山の南西側に隣接する花園村は奥部高野山に近い久木部落（標高700米）ではしゆるは寒害による影響を強く受け発育不良にして生育しても30年生に達するものはほとんど見られない。本村中部より下流（栽培地標高300米〜500米）にかけては特に寒気のはなはだしい年度において寒害を受けるが栽培は可能で本県の代表的栽培地の一つである。

日高郡龍神村がほぼ花園村と同一条件になると見られるが、其他は奥部を除き寒害を見る事は稀であつて、まず栽培可能の限界は高野山と花園村の間にあると考えるのが妥当のようである。

このように、昭和初期から中期にかけての棕櫚の研究では、高野町域付近に和歌山県における棕櫚の栽培限界地があると考えられている。しかし、さまざま文献に高野町域での棕櫚栽培に関する記述が散見される。

大正七年（一九一八）の『和歌山県伊都郡誌』には、伊都郡全域の棕櫚産業の特徴を取り上げ、高野町域のことにもわずかながら言及がある〔和歌山県伊都郡役所 一九一八〕。第三編「産業誌」第一章「沿革」に以下のように記載がある。

花園莊梁瀬村古向村等にては棕櫚を植付け、その皮を剥ぎて大阪に売出せ

り。梁瀬皮と称し毛長きを以て上品とせらる。

梁瀬村、古向村は、旧花園村である。花園村は有田川上流域であるが、高野山との関係も深く、伊都郡に属していた。現在、かつらぎ町花園梁瀬、花園古向となっている。

また、同書の第三編「産業誌」第三章「林業」の「林産」という項目に、用材より製出する板類・丸材・角材、雑木林より産出する木炭がおもなもので、棕櫚皮・樽丸がこれに次ぐとして、以下のように記載している。

棕櫚皮は古くより産出するものにして一万円以上あり。これを産地よりいへば（中略）花園村四郷村の棕櫚皮をその主なるものとす。

四郷村は、和歌山県と大阪府の境になる和泉山脈に位置し、現在、かつらぎ町に属している。伊都郡のなかでは、花園村と四郷村が棕櫚の産地として知られていたということを示している。

このほか、第三編「産業誌」第四章「工業」に「棕櫚細工」として以下のように出ている。

従来は棕櫚樹の皮をその儘他に販売せしが、十数年以前より之に加工して綱繩、靴拭タワシ、マット等を製造するに至れり。而して副業より転じて専業とするもの年々増加す。将来有望なる事業の一とす。最近の産額約八万円、その四分の一は山田村に産す。これにつぎて応其村花園村見好村は各一万円以上あり。其他笠田村矢野村高野村岸上村等に於ても行はる。

ここに書かれている高野村は、二章で述べたように、現在の高野町の中西部を指しており、筒香・富貴を除いた地域のことである。四章で紹介するように、筆者の聞き取りでは高野町域における棕櫚加工は確認できなかった。しかし、四章にある栽培状況と、地理的な特徴から考えれば、棕櫚加工をおこなっていたのは高野町の花坂あたりではないかと思われる。

なお、伊都郡に矢野村は存在しない。また、ほぼ同時期に刊行された『和歌山県農家の副業 二』には、「棕櫚繩及綱」の項目で、自家用としては県下各郡において製造しており、販売用の目的で製造しているのは伊都郡の場合は山田村（現在の橋本市）・見好（以下の村は現在のかつらぎ町）・笠田町・天野村・花園村・四郷村であるとしている（和歌山県農会 一九二〇）。これをみても、『伊都郡誌』の「矢野村」は天野村の誤記であると考えられる。

以上、大正時代の『伊都郡誌』によると、伊都郡での棕櫚産地は花園村と四郷村であったこと、明治末期から棕櫚皮を縄などの製品に加工するようになったこと、伊都郡の加工地は山田村が中心であったこと、高野村でも加工をおこなう者があつたこと、などが分かる。

昭和初期になると、伊都郡でも棕櫚新葉を生産するようになった。昭和八年（一九三三）の『伊都郡農勢』には、郡内町村別に昭和七年の統計が掲載されており、林産物の項目の中に棕櫚新葉がある。これによると、四郷村が二万五千貫、花園村が二万貫、高野町が八千貫、河根村（現在の九度山町）が三千四〇〇貫、天野村が一五〇〇貫（以下は省略）となっている。なお、『伊都郡農勢』には棕櫚皮という項目があがっていない。樹皮という項目はあるが、これは郡内の中で高野町がけた外れに多くなっている（和歌山県伊都郡農会 一九三三）。ヒノキ・コウヤマキの樹皮が中心であると考えられる。ヒノキ・コウヤマキの樹皮から生産するヒナワ・マキナワは高野町の特産であつた（高野町

史編纂委員会 二〇二二）。

昭和十三年（一九三八）の『和歌山県特殊産業展望』には、「本邦唯一の棕櫚晒葉の製造」という項目に「本県に於ける棕櫚栽培は古くから行はれ伊都郡の高野山を中心とする高野、花園付近、有田郡の五村、八幡村、那賀郡の長谷毛原、神野方面に集団的に植栽せられ」と記されている（和歌山県統計協会 一九三八）。

以上のように、大正から昭和初期の棕櫚に関する文献を確認すると、伊都郡では花園村と四郷村が棕櫚栽培の中心地であったが、高野町域においても棕櫚栽培は少なくなかったことが分かる。

このような郡誌や産業の統計に関する文献のほか、高野山へ参詣した者が記した紀行文などに棕櫚が登場することがある。昭和初期に複数回にわたって高野山を訪れている北尾謙之助は、『近畿景観』という紀行文を出版している。北尾は大阪毎日新聞社の写真部長であり、山岳家でもあった。『近畿景観』の四巻には「高野山の周囲」と題する文章があり、この中に棕櫚のことが記されている（北尾 一九三三）。北尾は、五月に矢立から花坂経由で不動野へ出て、神田を通り、上天野の丹生都比売神社（現在のかつらぎ町）へ向かっており、以下のような棕櫚の記述がある。

矢立は、（中略）なつかしい村であった。この辺では棕櫚の木の栽培が盛んなので、山腹の景観が不思議に新しく見える。（中略）花坂から不動野付近は、可なり道の曲折がはげしく、それに到るところ、低い山なみに棕櫚の林であった。（中略）山側の棕櫚の林の中から、皮を剥ぐ、ぱりぱりといふ音が、どことなく夕暮れの静寂の中から響いて来た。



写真1 花坂の集落（2011年9月12日撮影）



写真2 矢立の五八町石と棕櫚（『岩波写真文庫』〔岩波書店 1951〕より）

昭和初期には、高野山に関する案内記や参詣者による紀行文なども多数出ている。しかし、このように山村の生活が分かるような記述は多くはない。四章で取り上げるように、花坂付近は棕櫚栽培が盛んであったが、北尾の文章からは実感をともなうて伝わってくる。矢立は、高野山へと登る町石道の分岐点であり、ここから町石道をたどって高野山まで向かう間に人家はない。高野山とは反対に矢立から天野へ向かう場合、町石道を紀ノ川平野方面へと北西方向にたどることになる。しかし、北尾の場合は花坂の集落を見たかったといい、遠回りをして花坂を経由して不動野を通り、天野へ向かっている。花坂は盆地で、高野山周辺では人家も多く、水田が広がっている（写真1）。不動野は花坂中心部から天野の神田へ至る谷筋にあたる。花坂から不動野にかけての里に近い山に棕櫚が栽培されていた様子が北尾の文章から理解できる。

戦後、岩波写真文庫にも矢立の町石とともに、棕櫚が写っている写真が掲載

されている〔岩波書店 一九五二〕。写真の解説文に以下のように記されている（写真2）。

矢立の近くに58町の町石が立っている。後の棕櫚は山村の人たちが、副業の棕櫚縄をつくるために植えたもので、この辺りにたくさん見られる。

近年出された高野山町石道の植物をまとめた書籍にも、矢立付近に棕櫚林が存在することが紹介されている。より詳しくいえば、六〇町石から六五町石の山側に存在するという〔山元 二〇一五〕。これは、矢立から花坂を経由せずに天野へ向かう町石道の途上にあたる（写真3）。

高野町域における棕櫚について、郡誌や紀行文などに出てくる記述を紹介した。山村の副業的な存在であり、また、高野山参詣上の名所旧跡でもないため、棕櫚に関する記述は多くはないようである。なお、紀行文などで棕櫚が紹介される場合、高野山の北麓や西麓から高野山を目指す参詣者が多いため、矢立付近の棕櫚の記述が目立つということも考えられる。ただし、筆者が高野町全域を踏査した限り、現状では花坂、とくに不動野あたりの家の周囲や道沿いに棕櫚が目立っているのは確かである（写真4・5）。



写真3 花坂（矢立）（町石道から西方向を望む、道沿いに棕櫚がみえる）（2011年9月13日撮影）



写真4 花坂（不動野）の棕櫚（2011年9月12日撮影）



写真5 花坂（不動野）の棕櫚（家の左側に棕櫚がみえる）（2011年9月12日撮影）

## 五 高野町における棕櫚の聞き取り内容

本章では、高野町内で聞き取りをしたときに、棕櫚に関する内容が語られた部分を提示する。同一地区の場合には、聞き取り年月日の古いほうから順に並べる。

### 高野町西郷（尾細）

節供。シヨウブとヨモギをシユウロでくくって屋根の三か所に投げた。

### ◆ 岩坪綾子（昭和二年生まれ）

二〇一〇年一月三日聞き取り

### 高野町西郷（神谷）

シユロの皮は岸上から買いにきた。



◆ 崎山忠二・岡田里明

二〇一一年一月二日聞き取り

高野町西郷（作水）

シュウロ。畑のはたにあった。じゃまになって切った。昔は皮を剥いた。岸上の人が買いに来た。自分らで剥いた。くるつと巻いて剥いた。束ねておいたら売れた。

◆ 紙谷良子（大正一五年生まれ）

二〇一一年二月二三日聞き取り

高野町細川

シュウロの皮は岸上の業者が買いに来た。自分たちで剥いた。業者が電車来て、営林署のトラックで九度山まで運んだ。シンバも岸上の業者に売った。笠田の高田からも買いに来た（新谷氏は、大和高田と勘違いしていた）。顔見知りになったらシュウロも買って行った。シンバは生で出した。西細川にはシンバの組合があった。秤があった。シュウロは枚数で売った。シンバは目方で売った。束ねてくくって売った。組合の者が立ち会って、トラックへ積んで出した。シュウロは個人で売った。東はシンバも個人で売った。シンバは七〜八月、暑いじゅうだった。一年に一二枚葉が出る。開いたら葉になる。二番まで取るときもあった。東細川では二番まで取らなかつた。シュウロは収入源だったので、大事にした。田んぼがすんだらシンバの皮を剥いた。草取りが終わった時期だった。土用じゅうにやった。皮はいつでも取れる。縦に切って皮を剥



写真6 西郷（作水）の棕櫚（道の下に棕櫚がみえる）（2011年2月23日撮影）

いた。シンバはナタみたいなので切った。シンバは紀ノ川の川原へ並べて干した。業者が人を雇って干した。そうめんを食べてやった。川原の石は熱いので、きつい仕事だったと思う。

花園へ行くと、シュウロの縄ないをしてごみが多かつた。同じ人が相ノ浦へ行くと、相ノ浦は箸を作つたのできれいだといった。東では箸を作つたというのは聞かない。

◆ 新谷敏捷（昭和九年生まれ、東細川）、井戸坂昌夫（昭和五年生まれ、西細川）

二〇一〇年五月二〇日聞き取り

高野町細川（西細川）

家の前の山には、シュウロが植えてあつたので、見通しがよかつた。矢立へ行く道も見えた。スギを植えたので見えなくなつた。

◆ 井戸坂昌夫

二〇一〇年八月一四日聞き取り

高野町細川（西細川）

茶。売るために作つてはいなかつた。岸上か野からシュウロの皮を買いに来る人が持つて帰つたことはある。ずっと同じ人が来ていた。その家では人夫さんがたくさんいるので、茶を分けてくれんかといって



写真7 東細川（家の右上に棕櫚がみえる）（2010年1月3日撮影）

持つて帰った。茶を高野へ売ったことはない。細川でも寺へ納めた人はいる。聞いている。自分の家では納めに行つたことはない。

◆ 井戸坂昌夫

二〇一一年一月二日聞き取り

高野町花坂

シュウロばかり育てている山があった。花坂には大きなシュウロ山はなかった。花坂には、あつちに一〇本、こつちに五本と植えてあつた。シュウロは海南から買いに来た。一〇〇〇枚単位で売っていた。皮は自分で剥いた。百姓の合間のええ小遣い儲けになった。春はシンバを切つた。シンバを切つて新城、湯川へ寄せた。生のシンバを蒸して、干して乾かして、笠田へ出した。雪駄の表にしたり、パナマ帽に使つた。天気のエえときに干すと真っ白にあがる。夕立に会うと、寄せて回るのが忙しかった。五月ぐらいだった。皮を剥くのは年中。手のすいたときに剥いた。剥いて置いておいた。

◆ 上田央夫（大正一一年生まれ）

二〇一〇年五月二〇日聞き取り

高野町花坂

ブリ縄はシュウロの縄。自分らで作つた。今は残っていない。ブリ縄で木へ登つた。ブリ縄は強い。ナイロンはないので、シュウロか藁でな



写真8 花坂の棕櫚（水田の左に棕櫚がみえる）  
（2011年6月30日撮影）

いと縄はできなかつた。シュウロ縄は湿り気があつたほうが強い。

イタヤはシュウロのシンバを寄せていた。林さんという家。橋本屋という旅館をやつていた。旅館を始めたのは自分が子どものころ。知つている。

◆ 上田央夫

二〇一〇年十二月一日聞き取り

高野町花坂

門谷の家では、シンバを扱っていた。自分は全然知らない。皮も扱つていたと思う。シンバは帽子、扇子、草履に使つた。

◆ 門谷威侍（昭和一五年生まれ）

二〇一一年六月三〇日聞き取り

高野町花坂

シュウロ。一年に一二本シンバが出る。小さい木でも、五・六年たつたらできる。四〇cm以上ないと商品価値がない。開いたものはハエ叩きにする。七月の暑いときに、蒸して川原で干した。花坂で干した。笠田へ持つて行つた。新城では干す場所がないので、紀ノ川の川原で干した。二時間ほど干した。パナマ帽、カンカン帽、はきものの表にした。

◆ 上田央夫

二〇一一年九月一四日聞き取り

高野町湯川（上湯川）

湯川の収入源としては、炭の次にシュウロだった。多い少ないはあるが、各家にあつた。野上にシュウロの業者がいる。そこから買いに来た。かつらぎの

新城や長谷宮まで肩で負うて行った。新城の下に湯川の集積地があった。業者が現金を持って買いに来た。農閑期の仕事。冬から春暑くなるまで。シュウロの皮は漁師なんか潮水に一番強いという。皮は自分とこで剥いだ。一日一〇〇〇枚むくと一人前。自分は一日で一〇〇〇枚下ることはなかった。植えてから一五・六年か二〇年はかかる。二〇枚から三〇枚はむけた。毎年むけば一〇枚ちよつと。実を蒔いて、三・四年かけて苗をこしらえる。五月になると、ウシノウマという白くて堅いのが出てくる。シュウロノウマともいう。花が咲いて、実が何百となる。子どもころ、ウシノウマをひこずって遊んだ。実を取る以外に用途はない。一本から三・四本出てくる。シンバといって、葉の立って出てくるところがある。これは、雪駄の表にした。高級品の雪駄。シュウロは昭和初期。戦後はあかんかった。シュウロは山のすそ、畑の周辺に植えていた。肥沃なところでないとかかん。やせたところだと、成長も遅いし皮も薄い。スギ、ヒノキを植えている肥沃なところでないと言った。湯川のシュウロはよかつた。湯川は寒いので、網目が厚い。貴志川周辺は網目が薄い。

湯川に電気がついたのはシュウロがあつたから。昭和二三・四年まで値がよかつた。三〇年ごろ、あかんようになった。電気をつけるときには、シュウロのよけあるところはよけ負担した。用地や電柱も近くにあるものが提供した。一〇〇〇枚で五〇〇〇円から一万



写真9 下湯川の棕櫚 (2010年9月10日撮影)



写真10 上湯川の棕櫚 (2011年3月7日撮影)



写真11 西浦氏宅 (右側の家、家の右に棕櫚がみえる、家の手前にはコウヤマキが栽培されている) (2009年8月14日撮影)

田で売れた。  
 ◆ 西浦孝 (大正一三年生まれ)  
 二〇〇九年二月四日聞き取り  
 高野町湯川 (下湯川)  
 シュウロ山があつた。包丁で剥いた。新城へせつたらうて (背負つて) 下りた。観音さんまで運んだ。野上から買いに来た。現金収入になった。一〇〇〇枚を一荷。  
 ◆ 田中幸一 (昭和四年生まれ)・喜久子 (昭和五年生まれ)  
 二〇一〇年九月一〇日聞き取り

## 高野町湯川（下湯川）

シュウロ。夜にどろぼうに盗まれたこともある。

## ◆ 前誠一（昭和五年生まれ）

二〇一〇年九月一〇日聞き取り

## 高野町湯川（下湯川）

シュウロ。家で縄にすることはなかった。皮を剥いて売った。野上まで持って行くと、縄なんかに加工した。剥いて売るだけ。ほとんどの家にシュウロはあつた。自分の山のシュウロは自分で剥く。自分の家の山にもシュウロがあつた。五〇〇枚ぐらいを負うて、墓のところから細い道を下つて、新城のイワカミという家まで下した。シュウロはある家とない家がある。剥いてもらうのは、人を雇って剥いてもらった。だいたい秋やつた。野上からよう買いにきた。持つて行つてくれない。売つた人が新城まで持つていかなあかん（持つていかないといけない）。一人で五〇〇枚ぐらい負うたら精一杯やつた。シンバを切つて、花坂の林さん（イタヤ）へ持つて行つて売つた。草履にするといつたが、見たことはない。皮のぼうがお金になる。シンバは量が少ない。シュウロは収入源だつた。シュウロを主体にしている家は少なかった。自分の家が一番多かつた。苗を畑で作つて植えていた。自生はしない。子どもころにも植えていた。スギの木を伐つて植えた。スギは何十年たたと伐れない。シュウロは毎年金上がる。子どもころにはシュウロ山ばかりだつた。シュウロ山が増えていた。



写真12 西浦氏宅の棕櫚（2012年1月7日撮影）

## ◆ 安井精一（大正一三年生まれ）

二〇一〇年一月九日聞き取り

## 高野町湯川（上湯川）

ジネンジョもヤマイモの種類。ジネンジョは五・六年前まであつた。イノシシが全部食べてしまった。これを掘るのは大変。シュウロ山に育つた。

湯川では箸、杓子、椀を作る人はなかつた。【相ノ浦、大滝ではなぜ箸を作つていたのか、という問いに】相ノ浦、大滝ではスギを植えたところが多かつた。材木で出すのは大変。道路がないので。間伐で間引いて、もとのほうの枝のないほうを割つて、両口箸を作つていた。現金収入にしていた。

湯川ではシュウロが現金収入になっていた。箸まで労働的に間に合はん（箸を作るまで労働力が回らない）。農閑期にシュウロと炭をやつた。シュウロは大正ぐらいから。子どもころから大人になるころまでシュウロは盛りだつた。シュウロは植えてから一〇年かかる。苗を立てるのに五・六年かかる。田畑のケイハンに近いところに植えた。スギ、ヒノキみたいに、山の中腹、山のてっぺんまで植えて育つともんと違う。肥沃な、土の深いとこでないと、皮の厚いのが取れない。野上で作つていたので、野上谷はシュウロの産地だつた。野上のシュウロは皮が薄い。湯川は寒いので皮が厚い。シンバは、六・七月の成長時期に切つて、持つて帰つて、ハット釜で半日ぐらい焚いて干した。畑を作つているから、空き地はあまりない。道などの日の当たるところへ持つて行つて干した。高級草履の表に使つた。

炭を背負う道具は、オイコ、オイスケといった。オイコが本当だろうが、オイスケというほうが多かつた。湯川辻まで背負つて運んだ。自分もかなり運んだ。立つときに大変なので、息子にオイスケを背負わせておいて、炭を載せて



◆ 西浦孝・西浦トミ子

二〇一四年三月五日聞き取り

高野町相ノ浦

シユウロ。マキを植えているところはシユウロばかりやった。マキを植えるときに伐った。皮

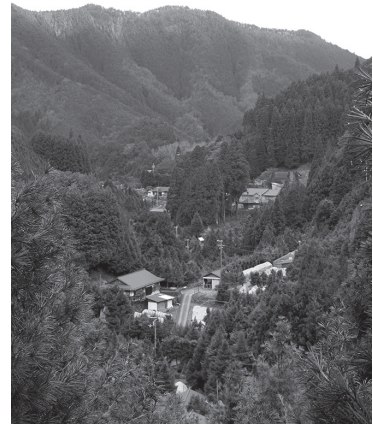


写真 14 相ノ浦の集落 (2011年3月2日撮影)

を剥ぎに来る人がいた。橋本付近の人だった。海南の阪井に加工するところがあった。タワシを作っていた。シユウロは皮剥ぎの人に任せてしまう。何日もかけて剥いていた。土地の人では剥いて売る人はなかった。毎年剥いているとええ皮が取れる。何年もおいとくとええ皮が取れない。シユウロには蜂がよく巣を作った。シユウロの山に柿があつて、子どものころに取りに行つた。枝をかきわけて行つたら、蜂に刺されたことがあつた。シユウロは家の周りに多かつた。遠いところにはなかつた。

◆ 保井国一 (昭和二年生まれ)

二〇〇九年三月二七日聞き取り

高野町相ノ浦

シユウロ。ちよつと植えてあつたけど、寒すぎるのか。久木、中南、梁瀬あたりまでどつさりあつた。相ノ浦にも皮を剥ぎにきた。どこから来たか分からない。花園ではわがとこ (自分の家) で剥いていた。

◆ 下西啓詞 (昭和九年生まれ)

二〇一一年三月二日聞き取り

高野町大滝

シユウロはなかつた。

◆ 西喜好 (昭和三年生まれ)・和江 (昭和三年生まれ)

二〇〇九年三月二八日聞き取り

高野町西ヶ峰

シユウロはなかつた。

チマキはシユロでくくつた。シユロは一本ぐらいあつたのだろう。シヨウブ風呂はした。屋根には投げない。

◆ 尾上洋子 (昭和六年生まれ)

二〇一〇年六月二四日聞き取り

高野町西ヶ峰

シユウロ。ちよいちよいあつた。売ることはない。稲荷さんのところにちよつとあつた。

◆ 福岡一二三 (大正一〇年生まれ)・弘衛 (昭和一六年生まれ)

二〇一〇年一月二六日聞き取り

高野町林

シユウロ。野上から皮を買いにきた。シユウロとシンバ。金になる。百姓の暇なときに剥いた。実家でも買いにきた。買いに来た人を泊めていたおばあさんがいた。この家の上にもあつた。切ってしまった。番匠さんの裏にもある。

七月七日は一人で山へ行ったらあかんという。ワライダにシュウロのシンバを採りに行ったおばあさんがいた。目がほおずきで、真っ黒の蛇がいたという。自分は山の主やといって帰したという。「見入られた」といって、それから「何にもしたくない」、と働かなくなってしまうた人がいた。七月七日に山に行ったらあかんのに行つたからやといつていた。ツチノコ騒動があつて、取材にも来た。ワライダは山が深かった。シュウロがいっぱい茂つていた。

◆ 古家照代（昭和三年生まれ）  
二〇一〇年六月二四日聞き取り

高野町南

シュウロ。戦後ちよつと買いに来ていた。どつさり生えとるけど、買いに来なくなつた。岸上のほうから来て剥いていた。一枚一〇円などで、値がよかつた。シュウロは家の周りにある。自分の家にはあるが、南には少なくなつた。

◆ 橋詰文雄（昭和三年生まれ）・  
イチ子（昭和九年生まれ）  
二〇〇九年三月二七日聞き取り

高野町南

シュウロはちよこちよこある。自分の家にはなかつた。剥きに来ていた。鎌みたいなので剥いていた。美里のほうから来ていたのか。今は来



写真 15 南・林の集落（左側が南、右側が林）（2010年6月24日撮影）

ない。

◆ 大谷富雄（昭和九年生まれ）  
二〇一〇年一月二五日聞き取り

高野町平原

（武彦氏の）父親は、若いとき、シュウロのシンバを買占めて、商売にしていた。長いことしていた。シュウロの皮も売つた。一円五〇銭だった。【一枚の値段か、という問いに】そうだった。郵便局の月給が一二円だった。橋本の人が剥きに來ていた。

◆ 榎谷武彦（昭和七年生まれ）・昌枝（昭和一四年生まれ）  
二〇一一年二月一六日聞き取り

高野町檜原（小安）

山鳥。赤いキジみたいになかつた。ナイロンがないから、シュウロをほとんど叩いて、細く繩にのうて、罌を作つた。

◆ 前正雄（大正一三年生まれ）  
二〇〇九年八月四日聞き取り

高野町檜原（小安）

シュウロは売るほどはなかつた。自分とこで使うだけは作つた。三本、五本し



写真 16 南の棕櫚（家の背後に棕櫚がみえる）（2010年6月24日撮影）

かない家もあれば、三〇本ある家もあった。ブリナワという木登りの道具をのうた(なつた)。腐らない。

◆ 前正雄

二〇一〇年九月九日聞き取り

高野町東又

ブリ縄。木へ登ったりするときを使う。平原に(静子氏の)姉の婿さんがいる。その人は木登り専門。その人にシュウロでブリ縄を作ってもらった。

シュウロ。いっぱい作っていた。シュウロムキ。橋本の岸上のほうの人たちが皮剥きに来ていた。泊り込みで来た。ニワで箆を敷いて寝ていた。シュウロはどつさりあった。自分では皮を剥かなかつた。シュウロはそんなに(背丈が)高くない。家の天井ぐらい。そうたいそな足場をせんでも(そんなに大きな足場をかけなくても)剥けた。簡単に剥ける。戦後も剥きに来ていた。秋ごろか。シュウロは伐つて、スギ、ヒノキを植えた。

◆ 下貞治(昭和六年生まれ)・静子(昭和九年生まれ)

二〇〇九年二月四日聞き取り

高野町杖ヶ藪

シュウロ。家で縄にのうたり(なつたり)した。春に芽が出てからシンバを切った。家で使う草履を作った。雨降りでもしゅんでこない(しみこんでこない)。シンバを買いにきた。安楽川(筆者注:紀の川市桃山町)のほうだったと思う。皮剥きにもきてくれた。土地の人も剥かんことはなかつた。野上、桃山あたりから来たと思う。岸上からも来た。シュウロに登って剥いて持って帰った。家の周りにもあつたが、伐つてしまった。

◆ 小峰正弘(大正一一年生まれ)  
二〇一〇年十一月二六日聞き取り

高野町中筒香

シュウロ。四〇五〇年前、業者が買いにきた。自分の家の上の大谷さんがいっぱい作っていた。海南のほうから業者が来たという。皮剥きに来ていたのは見た。五・六年続けた。上筒香にも、下筒香にも、ちよこちよこ作っていた。田んぼや畑のはたにちよこちよこ作っていた。年寄りが皮を剥いできて、筋にして、ロープに編んでいた。夜なべでおばあさんが縄を編んでいた。田植えのときに引く縄を作っていた。藁の縄だとまっすぐ引きにくい。シュウロの縄は水をはじくので軽い。まっすぐ引きやすい。一〇本や二〇本はどこでも作っていた。自分の家では売るほどはなかつた。自分の山からマキをせったらう(背負う)ロープを作ったりする。コシヅケという籠を縛るロープも作った。



写真 18 中筒香の棕櫚(家の左上に棕櫚がみえる)  
(2008年8月15日撮影)



写真 17 杖ヶ藪の棕櫚(畑の下のほうに棕櫚がみえる)  
(2010年11月26日撮影)



◆ 西山一高（昭和八年生まれ）

二〇一〇年八月六日聞き取り

高野町東富貴

シユウロは少しあるが、多くはない。売ることにはなかった。

◆ 下名迫勝實

二〇〇九年五月七日聞き取り

高野町西富貴

田植えは、直径五mmぐらいのシユウロの綱を引っ張って、それに合わせて、後ろへ下がりがりながら植えた。戦後には、枠ができて、枠に従って植えていった。

シユウロ。あんまりなかった。縄をのうた。牛追いの縄にした。田んぼの紐にした。最近、寺の鐘をつく棒にした。ひび割れしないという。こちらのシユウロはタワシにはむかない。野上方面に売ることにはなかった。

シノブという観賞用の植物がある。梅雨にかけて蔓が出る。盆のころに八方に葉っぱが出る。炭と土をシユウロで包んでシノブを植えて、吊るしておく。



写真 19 西富貴の棕櫚（畑の畦畔に棕櫚がみえる）  
（2009年5月14日撮影）

◆ 岡本幸治（昭和一〇年生まれ）・中山武夫（昭和一〇年生まれ）

二〇〇九年五月一四日聞き取り

高野町西富貴

岡本さんの父親はシユウロ縄をのうた。

◆ 岡本幸治

二〇〇九年八月六日聞き取り

高野町西富貴

節供。下の畑にシヨウブがある。ひもでくくって風呂に入れる。シヨウブに湯をかけるといい匂いが出る。柏餅を買ってきて供える。これは今でもしている。一〇年ほど前までは、五〜六〇cmのヨモギとカヤとシヨウブの根元五・六cmのところ縛って、各屋根へ三束ずつほりあげた。杉皮葺き、草葺きだと刺さるものもあった。今の屋根になると、風が吹いたらトユに散って、立トユを詰まらせることになるのでやめた。カヤは葉の出る前やからきれい。三つとも鮮やかできれい。ヨモギも一番きれいなとき。チマキも作った。笹の葉で団子を巻いて、シユウロの葉でくる。笹が二枚の場合と三枚の場合があった。三枚葉の場合は、二つなりのチマキができる。大きな釜で湯を沸かしてセイロで蒸した。笹の香りと甘いアンコの匂いがした。これほどおいしいものはない。餅米粉と米粉をちよつと入れることもある。米の粉を入れると、ひび割れしやすいため、つなぎにメリケン粉を入れる。家によって味も違う。汁が出るので、納屋の竿にチマキをぶら下った（吊り下げた）。汁を垂らすのと保存のため。

◆ 岡本幸治・中山武夫

二〇一〇年一月七日聞き取り

高野町東富貴

シュウロはあるが、皮を剥いて売ったことはない。買いに来たことはない。田植えのときに引くシュウロ縄は高いのを買った。

◆ 隠地前栄治・常子

二〇一〇年六月一七日聞き取り

高野町東富貴

近くでも苗をおいて渡した。シュウロのロープを張って植えた。上手な人はまつすぐ植える。下手な人は、完全に六条植えができるところを植えた。そういうところは距離が長い。上手な人は植えるのが早い。植えるときに、ちやぶちやぶと音がする。

◆ 稲葉敦美・尾家切美・板谷公八

二〇一〇年八月二〇日聞き取り

高野町西富貴

楮は聞かない。シュウロはこころでは作っていない。

◆ 林阪好登（昭和二年生まれ）

二〇一一年一月八日聞き取り

## 六 まとめと考察

### 1. 民俗知

高野町の人びとは、棕櫚のことをシュウロと呼ぶことが多い。日下部によると、伊都郡地方では、オンギ、メンギという区別をしているというが「日下部一九三九」、高野町での聞き取り調査では確認できなかった。棕櫚の皮および

新葉については、腐らない、雨がしみこまない、などといい、業者が重宝しただけでなく、自家用としてもさまざまな用途で利用した。

高野町内でも地域によって棕櫚栽培の差異がある。栽培に熱心であった地域でも、家ごとに棕櫚が多い家、少ない家があった。栽培に熱心であった地域や人の場合は、さらに棕櫚に関する知識を有していた。細川・花坂・湯川あたりでは棕櫚栽培が盛んであったために、棕櫚に関する民俗知識も多く語られた。なかでも、上湯川の西浦氏の場合は、若いころには炭焼きをしながら棕櫚栽培をしており、他の方々よりも棕櫚に関する知識が豊富であった。なお、西浦氏は、昭和三〇年代後半以降には、炭焼きと棕櫚栽培をやめて、林業に従事しながら、コウヤマキ栽培を手掛けていった。西浦氏は、「寒いところで育ったシュウロは生育が遅いので網が厚い」、「湯川は寒いので、網目が厚い」などと語る。高野町では上湯川の西浦氏以外からは聞くことがなかったが、同様の表現は、高野町のみならず、周辺各地で確認できる。『伊都郡誌』にあった、花園村梁瀬の棕櫚は毛が長くて上品というのも同様の表現であろう（和歌山県伊都郡役所 一九一八）。先行研究においても花園村（現在のかつらぎ町花園地区）で同様の表現があると述べられている（村上 一九九九）。筆者自身も紀美野町・有田川町各地で聞いたが、すべての地域で同様の内容が語られることはなかった。寒暖と棕櫚毛の長短や厚さが関係している語りは、おそらく買い手側（業者）が語っていたものであり、栽培者は買い手側の評価を受けて自分の地域の皮の良し悪しを認識していた、ということであろう。

### 2. 用途

#### a 皮と新葉の出荷

聞き取り調査からも、高野町における棕櫚の出荷には、皮と新葉があったこ

とが分かる(写真20・21)。皮は縄やタワシの材料にしたという。上湯川では、漁師が使用する縄にしたという語りもあった。ただし、全体として高野町内では、棕櫚皮の加工品や流通先についてはあまり語られることはなかった。仲買人や業者が買い取ったあとのことはあまり詳しく知らないようであった。一方、新葉については、パナマ帽・カンカン帽・雪駄の表などの材料にしたという。加工情報について、皮よりも新葉のほうが詳しい方が多かった。その理由としては、聞き取りをした方々の若いころ、つまり昭和一〇年代から二〇年代にかけては、新葉の取り引きが盛んになっていたこと(吉田ら 一九七七)、また、高野山西麓地域からは晒葉加工地(かつらぎ町笠田)に出やすかった、などの要因が影響していると推測できる。

**b 自家用での利用**  
聞き取り調査からも、棕櫚の皮はさまざまな用途で



写真21 棕櫚の新葉(紀の川市北長田、盆棚作りのために棕櫚の葉を採取していた方に同行して新葉を撮影)(2022年8月7日撮影)



写真20 棕櫚の皮(有田川町下湯川、現在でも棕櫚皮を採取している)(2020年8月7日撮影)

利用されることが分かる。あらためて列記すると以下ようになる。田植えのときに引く縄、牛追いの縄、牛の鞍とカラスキを結ぶ、背負い具の藁の部分と本体を結ぶ、ブリ縄、動物を捕る罟、籠を縛る縄、節供の菖蒲を縛る、粽を縛る、などである。つまり、生業(農業・林業・狩猟および運搬)、年中行事など、さまざまな場面で使用されていた。棕櫚の縄を自分の家でなう人もいたが、田植え用の縄を買う家もあった。皮の利用については、富貴のように棕櫚栽培が盛んではなかった地域でもおこなわれていた。縄をなう作業は女性がおこなうこともあった。

新葉の場合は、用途は限定的であった。家用の草履も作る人もいた。また、新葉の開いたものはハエ叩きにした。有田川町などでは、女性が家用の草履を作ったというが、高野町では確認できなかった。

その他、棕櫚の木を倒したあとで寺の鐘突きにしたこともあった。また、芯の部分をウシノウマ(シュウロノウマ)と呼び、子どもがこれを引きずって遊ぶこともあった。

### 3. 栽培

棕櫚を植えていた場所は、聞き取り調査で確認したところ、家の近く、田畑の近く、集落近くの山、などが多かった。現地調査で筆者が確認したところでも、家の周囲、畑の周囲、家の背後の低い山、道沿いなどの場所がよく見かけた。なかには、林のように深い山に植えていた、というところもあるが、林の場合は平坦な土地が少ないため、そのようなところに植えざるをえなかった、という可能性もある。

とくに熱心に棕櫚を栽培していたのは、聞き取りによれば、細川・花坂・湯川あたりであった。湯川では昭和二〇年代まで苗を作って植えていたようであ

る。上湯川で棕櫚栽培を熱心におこなっていた西浦氏は、「山の中腹、山のおつぺんまで植えて育つもんと違う。肥沃な、土の深いとこでないと、皮の厚いのが取れない」、「やせたところだと、成長も遅いし皮も薄い」、「田畑のケイハン（畦畔）に近いところに植えた」、などと語る。紀美野町や有田川町で棕櫚のことを聞いても、昔から植えている、植えたことは知らない、などと語る方も多い。自分で棕櫚の苗を育てて栽培したという方の証言は貴重である。西浦氏の家の周囲はコウヤマキ栽培地に転換しているが、家や畑の周囲には棕櫚の木が今でもわずかに残っている（写真10・11）。

西浦氏や下湯川の安井氏によると、畑に実を蒔いて、三〜五年かけて苗を育ててから苗を山に移植し、実を蒔いてから一五・六年から二〇年で皮が剥けるようになる。実を蒔いてから時間はかかるが、スギ・ヒノキの場合は植林してから伐採するまでに何十年もかかることに比べると収入になるまでの期間が短い。また、スギ・ヒノキが収入源になるまでには八〇年以上かかるのに対し、棕櫚の場合には毎年、現金収入になるということも重要視されていたようである。

#### 4. 皮剥き

棕櫚の皮は、自分たちで皮を剥く場合と、外部から皮を剥く人が来た場合があった。写真22は、昭和七年（一九三二）に高野町富貴の方が撮影したものである。撮影場所は不明であるが、高野町の東部の可能性が高い。

筆者は、令和二年（二〇二〇）、有田川町下湯川において棕櫚の皮を剥く様子を見学したことがある。棕櫚の木に足場を掛けて、幹の周囲に包丁を入れて一枚ずつ皮を剥いでいく、という作業を繰り返していく。

高野町では、自分たちで皮を剥く場合と、外部の人に剥いてもらう場合があ

ったようである。

皮剥きに関する下湯川の安井氏の語りはややあいまいではあるが、自分の家で皮を剥くことが基本で、棕櫚が多い家では人を



写真22 棕櫚の皮剥き（昭和7年（1932）撮影、撮影場所不明、高野町の個人所蔵、高野町教育委員会提供）

雇って剥いてもらうことがあり、安井氏の家は棕櫚が多かったので人を雇って剥いてもらうこともあった、ということであると思われる。上湯川では農閑期の仕事で、冬から春にかけて剥いたといい、林では百姓の暇なときに剥いた、という。自分たちで皮を剥く場合は、農閑期に剥いていたということになる。

上湯川の西浦氏によると、一日に一〇〇枚剥くと一人前といわれていたという。この表現は、紀美野町・有田川町一帯でもよく聞く語りである。棕櫚の皮剥きが得意であった方が誇りをもって語ることが多い。高野町では西浦氏以外からは聞くことがなかった。

なお、有田川町などでは棕櫚の皮剥きを女性がおこなうこともあったが、高野町では積極的に女性が従事していたということは確認できなかった。

また、相ノ浦では「毎年剥いているとええ皮が取れる。何年もおいとくとええ皮が取れない」と語られたが、これも紀美野町・有田川町一帯でよく聞く。とくに、棕櫚産業は昭和三〇年代後半から衰退したため、現在では何十年も皮を剥いていない棕櫚が多い。そうした棕櫚は皮がよくないという。

なお、皮剥きに来ていた人について、被差別地区の人たちであった、という語りもあった。本稿ではこれ以上確認できなかったが、地元の仲買人、加工地

の間屋・業者とは別に、皮剥き専門で働きに来ていた人たちがいた可能性がある。

### 5. 新葉切り

新葉は、七月ごろ、葉が開く前に切った。これも、田植えが一段落した農閑期にあたる。細川のように生で新葉を出荷した場合もあるが、花坂・湯川のよう釜で炊いてある程度乾かしてから出荷した場合もあった。出荷先の笠田では、紀ノ川の川原に広げて干していたという。花坂付近からは笠田方面へ出ることも多かったため、紀ノ川の川原に蒸した新葉を干していた光景を見ることがあったであろう。なお、晒葉加工は、県内でも紀ノ川沿岸地域に発達したが、それは乾燥場として広い川原が必要であったからという（目下部 一九三九）。

新葉切りについては、林での語りのように、女性がおこなうこともあった。新葉切りは皮剥きよりも手軽におこなうことができたからかもしれない。

### 6. 皮・新葉の出荷先

皮の出荷先は、野上・海南方面と橋本（岸上）方面があった<sup>(5)</sup>。話者によって、野上のほう、などとあいまいな表現をする方もあった。高野山北麓の西郷・細川は橋本方面、高野山西麓の花坂・湯川は野上・海南方面に出荷することが多かったようである。高野山南麓から東麓にかけては、橋本方面と、野上・海南方面の両方に出荷していたようである。なお、岸上村（現在の橋本市）の場合は、大正から昭和初期、棕櫚皮加工業者は多くなかった。むしろ隣接する山田村（現在の橋本市）に棕櫚加工業者が多かった（和歌山県伊都郡役所 一九一八）<sup>(6)</sup>。4節で述べたように、高野町の人々が語る岸上の人は、皮剥

表1 集落ごとの棕櫚

集落名	棕櫚のある場所	皮の販売先	皮を剥く人	新葉の販売先	仲買人
西郷	畑の近く	岸上	自分たち		
細川	家の近くの山	岸上	自分たち	岸上、笠田	
花坂	あちこちに点在（5本、10本など、大きな棕櫚山はなかった）	海南	自分たち	笠田	花坂にシンバを集荷する仲買人がいた
湯川	シュウロ山が多かった、ほとんどの家にシュウロ山があった、山のすそ、畑の周囲	野上	自分たち	花坂の仲買人	
相ノ浦	家の周り（遠いところにはなかった）	橋本付近、海南に加工場	橋本付近の人が剥きに来た		
大滝					
西ヶ峰	ちよいちよいあった、稲荷さんのところなど				
林	家の裏、深い山	野上から買いに来た	自分たち		
南	どっさりあった、家の周り		岸上のほうの人が剥きに来た		
平原			橋本の人が剥きに来た		新葉・皮の仲買人がいた
檜原	多い人で30本				
東又	どっさりあった	岸上	岸上のほうの人が剥きに来た		
杖ヶ敷	家の周りにもあった	野上・桃山あたり、岸上	剥きに来た、自分たちも剥くことがあった	安楽川のほう	
筒香		海南のほう	剥きに来た、自分たちも剥くことがあった		
富貴					

きをして、皮を買い集め、山田村などに販売する仕事に従事していた可能性がある。なお、筆者がこれまで橋本市・九度山町・かつらぎ町・紀の川市・紀美野町・海南市・有田川町の民俗調査の際に棕櫚のことを聞いてきたなかでは、岸上から皮を剥きに来た、買いに来たという語りは、本稿で対象とした高野町のほかでは九度山町東郷、橋本市向副で聞いた程度であった。

新葉については、いずれの集落でも笠田方面へ出荷することが多かったが、橋本方面に出荷することもあったようである。昭和初期には、笠田町・大谷村・妙寺町・四郷村・見好村（いずれも現在のかつらぎ町）に晒葉業者が集中していた〔目下部 一九三九〕。高野町の人々にとっては、笠田という認識であったが、実際には笠田周辺一帯で晒葉加工がおこなわれていたようである。また、販売先を安楽川、桃山方面と語る方もいた。安楽川（旧那賀郡桃山町、現在は紀の川市桃山町）には、晒葉の業者がいたため〔目下部 一九三九〕、この場合は新葉の出荷であったと考えられる。

皮や新葉は、高野町内に仲買をして集荷する人もいた。西麓では花坂、東麓では平原に仲買をする人がいた。とくに新葉を買い集めていたという。花坂は湯川方面から、平原は摩尼地区の新葉を集積しやすい場所であった。また、平野部への道が通じていたため加工地に出荷しやすい場所に位置していた。湯川では、皮については自分たちで新城（かつらぎ町）まで下ろしていた。新城も山の産物を集荷して、平野部の町へ出荷しやすい物流の拠点であった。

## 7. 地域差

高野町の棕櫚栽培は、家によって本数に差異があったが、地域によっても差異があった。概して、高野町の西部（北麓から西麓）では盛んであったが、中部から東部（南麓から東麓）ではあまり盛んではなかった。西細川には新葉の

組合もあった。湯川では、炭の次に大きな収入源であったと語られる。南麓から東麓にかけては栽培もされていたが、自分たちで皮を剥かずに剥きに來る人に任せていた。集落単位での出荷量のデータは確認できなかったが、人びとの語りから判断すると、東麓の場合は、北麓・西麓ほどには栽培・出荷が盛んではなかったと思われる。さらに、高野町東端の富貴では棕櫚がわずかにあったものの、栽培や出荷については確認できなかった。高野町内における棕櫚栽培の地域差について、標高、流通網、生業の観点から背景を分析しておきたい。

## 8. 標高との関係

現地調査をもとに国土地理院地図において標高を確認し、集落ごとに標高を示したものが表2である。この標高は、集落中心部を基点とし、おもに棕櫚が植栽される集落背後の山までの標高を示している。西郷の場合は、作水・尾細・桜茶屋・神谷の小字が東高野街道に沿って尾根上に立地しているため、標高差に幅がある。集落中心部が標高七五〇m付近の大滝・西ヶ峰の場合、棕櫚栽培はおこなわれていなかった。ただし、西ヶ峰にも棕櫚は何本があったという。西ヶ峰から棕櫚を出荷していたということは確認できなかったため、おそらく自家用に使用するためにごくわずかな本数を植えていたという程度である。

集落中心部が標高六〇〇m

前後の相ノ浦・林・南の場合でも棕櫚は栽培されていたが、北麓・西麓ほど盛んではなかった。これらの集落が棕櫚栽培の限界地ということに

表2 集落ごとの標高

西郷	150～500
細川	300～450
花坂	400～500
湯川	500～550
相ノ浦	600～700
大滝	750～850
西ヶ峰	750～850
林	600～750
南	600～750
平原	400～500
檜原	550～700
東又	500～600
杖ヶ藪	400～600
筒香	400～550
富貴	550～700

なる。相ノ浦では隣接する花園村と比較して、この地域は寒いために棕櫚栽培が盛んではなかったという語りがあった。

標高からみれば、三〇〇〜六〇〇mの間が最も盛んであったということになる。細川・花坂・湯川および、東又・杖ヶ藪・筒香付近である。

富貴の場合は、標高六〇〇m前後であるため栽培限界地ということではない。この場合は、標高以外の要因によって棕櫚栽培を選択しなかったということが考えられる。

### 9. 流通網との関係

先述したように、高野山西麓に位置する湯川・花坂の場合は、皮を野上・海南方面へ出荷していた。こうした流通網は、地理的な要因が考えられる。野上・海南は、棕櫚産業の中心地であり、貴志川流域・有田川流域の棕櫚を集積して加工し、全国的に販売していた。三章で述べたように、伊都郡花園村は有田川最上流域に当たる。花園村からは野上・海南方面へと出荷していた。また、有田川の北に位置する貴志川流域、さらに北側の真国川流域においても、これらの河川沿いに野上・海南へと皮を集積する流通網が発達していた。湯川・花坂は貴志川流域の最上流域に当たる。湯川から湯川川を下って貴志川に合流する地点が新城である。新城に棕櫚皮を集積し、新城の下流に位置する長谷・毛原地区、さらに下って野上・海南方面へ運ばれた。野上・海南の業者からみれば、花坂・湯川は集荷地域の最上流域ということになる。

一方、高野山北麓に位置する西郷・細川の場合は、岸上方面へと出荷していた。高野山より北に向かうと、紀ノ川流域の中心都市としての橋本市が存在する。岸上は橋本市の西部に位置する。岸上からみれば、身近な南側の山地より棕櫚皮を調達したことになる。ただし、6節でも述べたように、岸上で加工す

るだけではなく、隣接する山田村などに販売していた可能性がある。

高野山東麓については、野上・海南、橋本の二方面から流通網が伸びていた。野上・海南の業者にすれば、高野山を越えた東側に位置しているため、集荷が容易ではなかった。しかし、橋本市の岸上からであれば、丹生川沿いを通るルートで集荷することができた。

新葉については岸上でも集積していたが、圧倒的に笠田に出荷する場合が多かった。笠田に運ぶ場合は、花坂から西高野街道を下っていくことになる。

### 10. 地域の生業との関連

高野山東麓の摩尼地区で棕櫚栽培については、以上のように橋本方面への出荷ルートがあったためと推測できる。しかし、摩尼地区の場合は別の理由も考えられる。摩尼地区では林業が盛んであったため、木に登るためのブリ縄を使用した(写真23)。棕櫚で作ったブリ縄は丈夫であったという。ブリ縄製作は摩尼地区で伝承されてきた技術であった(「高野町教育委員会から一九六九」。標高も高く、野上・海南方面へ出荷することが容易ではない高野山東麓の摩尼地区の場合は、地域の生業に関係して棕櫚を栽培するようになった可能性がある。

一方、高野町東端の富貴の場合は、標高五〇〇m前後の場所に広大な平地が広がっている。したがっ



写真 23 ブリナワを使用して木に登る (高野町教育委員会提供)

て、稲作・畑作も盛んで、菓草栽培などもおこなわれてきた。棕櫚栽培に割くための時間的および空間的な余裕がなかったと推測できる。言い換えれば、棕櫚栽培よりも収入のよい換金作物を栽培してきたということもできる。

このように、高野町内において棕櫚栽培の地域差が生じていた背景としては、標高、流通網、他の生業との関係などが影響していたと考えられる。

### おわりに

棕櫚を扱った先行研究では、産業史などの立場からは、棕櫚産業に焦点が当てられているため、加工地域の考察が多く、栽培地域を対象としたものが少なかった。地理学・民俗学の棕櫚に関する先行研究では栽培地の民俗を取り上げたものはあった。しかし、栽培限界地といわれてきた高野山周辺地域について分析した論考は皆無であった。筆者は、高野町史の生業調査のなかで、町内各集落において棕櫚のことを聞いてきた。本稿では、聞き取り内容を中心に、高野町の棕櫚の民俗を分析した。その結果、昭和中期までは高野山周辺の栽培限界地付近まで棕櫚栽培がおこなわれていたこと、標高のみならず出荷先への流通ルートやその他の生業との関係などによって同じ高野町内でも棕櫚栽培に差があったこと、などがわかってきた。

ただし、現在の和歌山県内では、棕櫚栽培は有田川町の一部でおこなわれている(写真24)、棕櫚加工は海南市・紀美野町においてわずかにおこなわれている程度となっている。本稿で対象とした高野町では棕櫚栽培および出荷はおこなわれていない。昭和三〇年代後半に棕櫚産業が衰退したあと、棕櫚栽培はほぼ終了し、棕櫚を伐採してコウヤマキ栽培に転換した家や地域が多い。とくに相ノ浦、湯川では棕櫚栽培地の跡地にコウヤマキを植えるようになった。コウヤマキの枝は、高野山参詣人に土産として販売されるものである。江戸時代からコ

ウヤマキを販売する習俗は存在したが、高野山周辺で本格的に土産用として栽培を始めたのは昭和三〇年代後半からであった。コウヤマキ栽培もこの地域の特徴であるため、別稿を予定している。

また、和歌山県北部の棕櫚栽培、加工業についても調査を継続している。棕櫚に関する文献調査もおこなっている。海南市・紀美野町・有田川町だけでなく、かつらぎ町・紀の川市でも聞き取り調査もおこなっているが、広範囲におよび、話者も多数になるため、時間をかけてまとめる予定にしている。

### (注)

- (1) 本稿では植物名および方言名はカタカナ表記とする。それ以外は原則として棕櫚という表記を使用する。ただし、文献などで「棕栢」の字が用いられている場合は、そのまま記載する。
- (2) 堂嶋海山は有田川町と紀美野町の境界に位置する長峰山脈の峰のひとつで標高八七〇mである。有田川町楠本の背後の山になる。この山には古代から中世にかけて伽藍が存在した(和歌山県立博物館 二〇一七)。
- (3) 「藤井 二〇一四」に棕櫚流通の一端をまとめたが、全体像については未発表。



写真24 棕櫚の皮剥き(有田川町下湯川、2020年8月7日撮影)



(4) 「日下部 一九三九」には、大正九年刊行の柳野源之助『和歌山県の棕櫚栽培』が「唯一の参考書」と記されている。その後も、「吉田ら 一九七七」などでこの文献は引用されている。しかし、現在では和歌山県内および全国の公共・大学図書館で同書の所蔵は確認できなかった。

(5) 地理的には野上谷の入り口にあたる。現在の市町村名でいえば、海南市東部から紀美野町西部にかけての地域に棕櫚加工産業が発達した。厳密に言えば、棕櫚産業が盛んであった巽村・中野上村は、昭和三〇年（一九五五）に海南市に合併した。ただし、東野上町は同年、海南市へ合併せずに野上町となり、現在では紀美野町になっている。したがって、本稿では話者の語りも尊重して、野上・海南方面と表現しておく。

(6) 明治三五年（一九〇二）の第五回内国勸業博覧会町村出品表によると、「棕櫚皮」と「棕櫚繩」という項目がある。岸上村からはいずれも出品はない。一方で、山田村からは棕櫚皮が二、棕櫚繩が二〇、出品されている〔橋本市史編さん委員会 二〇〇三〕。

(7) 九度山町東郷では「岸上からは竹の皮も買いに来た」、橋本市向副では「岸上は竹の産地であった」、と語られた。高野町では岸上と竹との関係は語られなかった。

〔参考文献〕

岩波書店編 一九五一 『岩波写真文庫 三九 高野山』 岩波書店  
 海南市立歴史民俗資料館編 一九九八 『展示解説集 第一七集 海南地方における家庭用品産業の歩み ―棕櫚加工業から合成繊維加工業へ―』 海南市立歴史民俗資料館  
 海南地方家庭用品産業史編さん委員会編 一九八九 『海南地方家庭用品産業

史』 海南特産家庭用品協同組合

加藤幸治 二〇〇五 「近代における山地の諸生業の地域的展開 ―貴志川中流域における聞き書きを中心に―」 『近畿民具』 二八

「角川日本地名大辞典」編纂委員会編 一九八五 『角川日本地名大辞典 和歌山県』 角川書店

北尾鏡之助 一九三三 『近畿景観 四 紀伊 伊賀』 創元社

日下部兼道 一九三九 『農山村副業叢書 一一 棕櫚の栽培と利用』 大日本

山林会

高野町教育委員会・高野町教育研究会編 一九六九 『わたしたちの高野町』

高野町教育委員会

高野町史編纂委員会編 二〇二二 『高野町史 民俗編』 高野町

瀬田勝哉 一九九五 「宝前の棕櫚」 『朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読みながら』

おす一一 『朝日新聞社

西久保俊郎 二〇〇一 『シュロの歌 ―その植栽と産業的発展の歴史―』 私

家版

野上町誌編さん委員会編 一九八五 『野上町誌 下』 野上町

橋本市史編さん委員会編 二〇〇三 『橋本市史 近現代史料Ⅱ』 橋本市

藤井弘章 二〇一四 「民俗調査からみた神野・真国荘地域の生業」 高木徳郎

編 『紀伊国神野・真国荘地域総合調査』（平成二三年～二五年度科学研究費

補助金 基盤研究（C）研究成果報告書 研究課題「紀の川流域における中

世荘園の地域環境史的研究」研究代表者 高木徳郎

藤田和史 二〇一七 「わかやまの風土産業」 東悦子・藤田和史編 『フィール

ドミューリアム叢書 四 わかやまを学ぶ 紀州地域学 初歩の初歩』 清文

堂

藤田和史 二〇一八 「野上谷のシユロと家庭用品」和歌山大学観光学部監修

『大学的和歌山ガイド ―こだわりの歩き方』昭和堂

藤田和史 二〇二〇 「特用林産物シユロの栽培と利用」『食農総合研究所研究

成果 一四 和歌山県農業展開史Ⅱ』和歌山大学食農総合研究所

松本由良 一九五二 『林業普及シリーズ 三三 しゅろ』日本林業技術協会

村上弥生 一九九九 「ヤシ科植物シユロの利用 ―和歌山県紀北地方の事例

を中心に―』『日本民俗学』二二八

山下慎昭 二〇〇五 「棕櫚（しゅろ）」を知っていますか？ しゅろの棕

櫚を訪ねて〜』『21世紀わかやま』四六

山元晃 二〇一五 『自然の扉 世界遺産 高野山町石道の草木花と寄り道』

あいらり出版

吉田昇三・安藤精一・殿井一郎 一九七七 『和歌山県繊維産業史』和歌山県

繊維工業振興対策協議会

和歌山県伊都郡役所編 一九一八 『和歌山県伊都郡誌』和歌山県伊都郡役所

和歌山県伊都郡農会編 一九三三 『伊都郡農勢』和歌山県伊都郡農会

和歌山県統計協会編 一九三八 『和歌山県特殊産業展望』和歌山県統計協会

和歌山県内務部編 一八九三 『和歌山県農事調査書』下 和歌山県内務部

（同編 一九六三 『明治文献研究シリーズ 二 和歌山県農事調査書下』

明治文献研究会 収録）

和歌山県那賀郡編 一九三二 『和歌山県那賀郡誌 上』那賀郡

和歌山県農会編 一九二〇 『和歌山県農家の副業 二』和歌山県農会

和歌山県立博物館編 二〇一七 『有田川中流域の仏教文化 ―重要文化財・

安楽寺多宝小塔修理完成記念―』有田川町教育委員会

#### （付記）

高野町史民俗編の調査では、当時の高野町史編纂委員、および編纂室の方々に大変お世話になった。編纂室の長岡弘樹氏には調査の調整をいただき、ほとんどの調査に同行いただいた。編纂委員の森本一彦氏、伊藤信明氏にはこの地域の民俗文化全般について多くのご教示をいただいた。富貴地区・花坂地区では近畿大学民俗学実習でもお世話になった。高野町では多くの方々にお話をうかがった。また、本稿をまとめる際に、高野町教育委員会の飯野尚子氏に写真提供をいただいた。すべての方々にあたたためて御礼申し上げます。この報告が高野町に暮らしてきた方々の生活文化の一端を記録として残すことに貢献できればと願っている。

なお、注記したもの以外の写真は筆者撮影のものである。